

美術工芸資料館と「村野藤吾の設計研究会」が、日本建築学会賞を受賞しました

昨年、本学美術工芸資料館と「村野藤吾の設計研究会」は、2015年度の日本建築学会賞業績賞を共同で受賞しました。受賞対象は、「村野藤吾図面資料アーカイブを用いた一連の展覧会・教育・研究事業」です。

本誌では、これまでも「美術工芸資料館収蔵品紹介」として、建築家・村野藤吾の図面資料アーカイブとその展覧会についてご紹介してきました。今号では「美術工芸資料館収蔵品紹介」は休載とし、今回の受賞を契機に、「村野藤吾の設計研究会」委員長の石田潤一郎教授(デザイン・建築学系)より、改めて美術工芸資料館と「村野藤吾の設計研究会」の活動の全体像をご紹介します。ご支援いただいた方々へのお礼に代えさせていただきます。

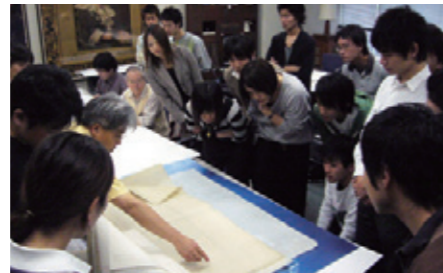
1. 事業の経緯

今回、私たちの活動に対して、「近現代建築アーカイブのバイオニア的存在であるだけでなく、アーカイブ構築、調査・研究、展覧会、教育現場との連携を巧みに組み合わせ、そのことでそれぞれがより充実するという点がユニークである」との評価を戴き、日本建築学会賞受賞に至りました。そこで、「展示・研究・教育」の3分野の総合をどう構築したか、その過程をまず述べます。

村野藤吾(1891~1984)は1920年代後半から亡くなるまで、約60年の長きにわたって活躍した建築家で、近現代の日本の建築界を代表する一人です。ヒューマニズムを標榜して独自の作風を確立し、文化勲章をはじめとする高い評価を得ました。

本学美術工芸資料館は、1990年代半ばから、この村野藤吾の図面資料を収蔵してきました。美術工芸資料館が村野資料を収蔵するにいたった経緯は、次のとおりです。1992年に村野藤吾の子息、村野濠氏から美術工芸資料館に、村野に関する図面資料一式を寄贈すると申し入れがありました。初代館長でもあった中村昌生名誉教授に村野藤吾が信頼を寄せていたことに加え、美術工芸資料館の専任教員

であった竹内次男助教授(のち教授・館長、現名誉教授)の父が戦前に村野事務所の所員であったという縁もあり、本学が寄贈先選ばれたということです。1994年から断続的に村野事務所の図面資料が館に運び込まれ、整理が始まりました。その後1995年の阪神淡路大震災の発生により村野事務所での保管が難しくなったことから、搬入作業が一層進み、1996年から98年頃にかけて多くの資料が収蔵されます。世界的に見ても建築図面のアーカイブがほとんど存在しない中、竹内助教授は苦心惨憺して整理の方法論を構築していきました。



図面資料の整理に取り組む学生



模型制作の様子

この資料収蔵を受けて、1998年に本学の建築系の教員数名および、学外の建築の専門家数名を委員とした「村野藤吾の設計研究会」を学内に設置しました。マンパワーを結集することで、美術工芸資料館の図面資料アーカイブを構築するとともに、これを用いて展覧会や調査・研究などを企画、実施しようと考えたわけです。初代委員長は、率先して図面の整理と分析を手がけていた西村征一郎教授(現名誉教授)が務めました。こうした図面との格闘の最初の成果として、1999年、研究会と美術工芸資料館が共同で主催し、第1回「村野藤吾建築設計図展」を開催する運びとなりました。

2. 図面整理と展覧会

以後、今日に至るまで、5万6000枚余の図面の整理校訂の作業を続けております。また、新たに収蔵された村野作品に関わる家具・装飾品・写真資料などについてもその分析を進めてきました。その成果は、2014年度までに合計13回開催した展覧会において発表してきました。展覧会開催にあたっては、毎回100頁内外の図録「村野藤吾建築設計図展カタログ」を刊行し、さらには記念シンポジウムを挙げて、アーカイブから得られた知見を広く発信しています。

こうした活動を行うためには、関係者の熱意だけでなく、資

金が必要です。特に活動開始当初は、本学OBをはじめとして多くの方々からのご寄附に支えられました。研究会メンバー一同、深く感謝申し上げる次第です。それによって実績を積んだことで、科学研究費補助金やポーラ美術振興財団助成金、ユニオン造形文化財助成金、大成建設自然歴史環境基金を獲得でき、今日まで活動を継続することができました。

3. 教育・研究との連携

受賞のタイトルに掲げられるとおり、私どもの活動は展覧会だけにとどまっておられません。村野藤吾の設計研究会委員には、アーカイブ資料の分析成果を基礎として日本建築学会等の学術雑誌に論文として発表し、それを博士論文として完成させた者が2名おります。また、展覧会では扱いにくい精細な分析、あるいは資料の書誌学的な考察といった話題については、研究誌『村野藤吾研究』を発行し、世に問うています。

さて、美術工芸資料館は、国立大学としては東京芸術大学などにしか存在しない、数少ない大学附属の美術館の1つです。この特性を生かすべく、図面資料アーカイブの整備や展覧会開催を大学・大学院の教育プログラムの一環に組み込み、学生らが展示用の模型を制作し、展示計画をたて、図録の編集を担当する体制をつくりました。10年以上にわたって制作しつづけて

きた村野作品の模型は、約80点に及びます。そして、その模型自体を主役とする展覧会「村野藤吾の建築—模型が語る豊穡な世界」が2015年夏に東京都目黒区美術館で開催され、大きな反響を呼びました。この展覧会は今春、本学美術工芸資料館に巡回することになりましたので、その圧倒的な精度の高さを皆様のお目にかけることができます。(開催期間:3月14日(月)~6月11日(土))

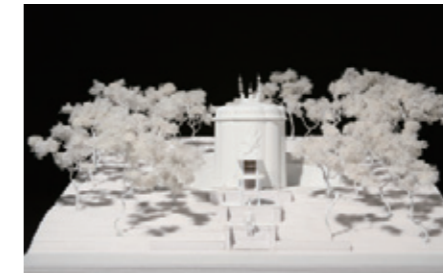
また、アーカイブ整備を通じて学生が得た知見による修士論文も、これまでに16編生まれています。

4. 村野アーカイブの独自性

近年、建築設計図面や模型、写真といった建築資料自体の価値が目まぐるしく上がっています。それにとれない、建築資料の収集や展示を目的とする機関が設立されはじめました。代表的なものとして、日本建築学会建築博物館や国立近現代建築資料館、金沢工業大学建築アーカイブス研究所が挙げられます。これらは、それぞれに全国的な規模で資料を網羅的に収集しており、日本の建築学の発展にとって欠かせない存在となっています。しかしながら、展覧会の規模、図録の充実度においては本学に一日の長があるといえます。さらに教育・研究との連携という点では、本学の独壇場であると自負するところです。

近年、村野作品が文化財に指定され、その修復のために設計図が必要とされることも生じてくる一方で、建物を取り壊され、図面だけが建築を知る手がかりとなる場合も増えてきました。さまざまな局面で村野図面の重要性が高まっていることを実感しています。

しかし、村野藤吾の図面資料には、なお未整理の部分も残ります。私たちは、今後も気を緩めることなく研究活動を継続させ、「村野藤吾の設計研究会」メンバーにゆだねられた宝の価値を、十全に生かしていきたいと改めて願う次第です。



飯田家納骨堂計画案(1951年)の模型



第12回村野藤吾建築設計図展 会場の様子

参考:「村野藤吾の設計研究会」本学関係メンバー
・石田潤一郎教授(委員長/デザイン・建築学系)
・松隈 洋教授(教育研究推進支援機構系、美術工芸資料館)
・中川 理教授(デザイン・建築学系)
・角田暁准教授(デザイン・建築学系)
・笠原一人助教(事務局/デザイン・建築学系)
・三宅拓也助教(デザイン・建築学系)
・西村征一郎名誉教授
・竹内次男名誉教授